

中国語話者における 日本語の有対動詞の自動詞・ 他動詞・受身の選択について ——人為的事態の場合

杉村 泰

●要旨

日本語では例(1)～(4)のように同じ人為的事態を表す表現でも、自動詞・他動詞・受身が様々に選択されるため、学習者はその選択に困難を覚える。

- (1) さあ、肉 {が焼けた／?を焼いた／?が焼かれた} から食べよう。
- (2) さあ、ケーキ {?が切れた／を切った／?が切られた} から食べよう。
- (3) 冷蔵庫によく {冷えた／?冷やした／?冷やされた} ビールがある。
- (4) ビール {が5°Cに冷え／を5°Cに冷やし／が5°Cに冷やされ} ている。

そこで本稿では日本語母語話者と中国語を母語とする上級日本語学習者の選択傾向を比較し、母語話者は動作主の存在を強く認識しなければ他動詞を選択しにくいのに対し、学習者は動作主の存在を感じれば他動詞を選択しやすいことを指摘する。

●キーワード

中国語母語話者、有対動詞、受身、意図性、自発性

●ABSTRACT

The use of intransitive, transitive, and passive sentences in Japanese depends largely on circumstances. Examples (1) to (4), which express artificial events, are a point in case. However, it is difficult for L2 learners of Japanese to correctly select one among them.

- (1) *Saa, niku {ga yaketa / ?wo yaita / ?ga yakareta} kara tabeyoo.*
- (2) *Saa, keeki {?ga kireta / wo kitta / ?ga kirareta} kara tabeyoo.*
- (3) *Reizouko ni yoku {hieta / ?hiyashita / ?hiyasareta} biiru ga aru.*
- (4) *Biiru {ga 5°C ni hie / wo 5°C ni hiyashi / ga 5°C ni hiyasare} te iru.*

In this paper, we compare the tendency of selections by native Japanese speakers and superior level Chinese students of Japanese. The results of a survey make it clear that native Japanese speakers generally abstain from selecting transitive sentences if they are not strongly aware of the existence of an agent. On the other hand, learners of Japanese tend to select transitive sentences if they are conscious of the existence of an agent.

●KEY WORDS

Chinese speakers, paired verbs, passive sentences, intentionality, spontaneity

An Analysis of Chinese Speakers' Selection Among Pairs of Intransitive, Transitive, and Passive Verbs in Japanese Expressing artificial events
YASUSHI SUGIMURA

1 はじめに

日本語学習者（以下「学習者」と呼ぶ）にとって有対動詞（「相對動詞」ともいう）の自動詞・他動詞・他動詞の受身形（以下「受身」と呼ぶ）の選択は習得困難な項目の1つである。この原因は、従来指摘されているように日本語はナル的言語であり、「このたび結婚することになりました」の例に代表されるように、人為的行為による場合でも他動詞ではなく自動詞が使われることがあるためである。学習者は、動作主が自分で結婚を決めた場合でも「結婚することにした」ではなく、「結婚することになった」と言う感覚がつかみにくいため、困難さを感じるのである。

ここで問題となるのは、同じ人為的行為による場合でも自動詞を使うこともあれば他動詞を使うこともあり、受身を使うこともあるという点である。たとえば、動作主の行為によって対象に変化が生じることを表す場合、日本語では例（1）、（2）のように他動詞ではなく自動詞で表されることがある。

- (1) さあ、肉 {が焼けた／を焼いた／が焼かれた} から食べよう。
- (2) さあ、今日の夕食のメニュー {が決まった／を決めた／が決められた} よ。

しかし、同じ人為的行為による対象の変化を表す場合でも、例（3）のように他動詞を使った方が自然な場合もあれば、例（4）のように自動詞でも他動詞でも使える場合もある。

- (3) さあ、ケーキ {が切れた／を切った／が切られた} から食べよう。
- (4) さあ、お茶 {が入った／を入れた／が入れられた} からひと休みしよう。

また、同じビールの冷えた状態を述べる場合でも、例（5）のように自動詞がふさわしい場合もあれば、例（6）のように自動詞でも他動詞でも受身でも

使える場合もある。このため、学習者には自他の選択基準がよく理解できず、その選択が困難に感じられるのである。

- (5) 冷蔵庫によく {冷えた／冷やした／冷やされた} ビールがある。
- (6) ビール {が5°Cに冷え／を5°Cに冷やし／が5°Cに冷やされ} ている。

しかし、このような細かい点については従来あまり詳しく論じられてこなかった。そこで本稿では守屋（1994）や曾（2012）にならって自動詞・他動詞・受身の選択テストを作成し^[註1]、日本語母語話者（以下「母語話者」と呼ぶ）と中国語を母語とする上級日本語学習者の選択基準の違いを明らかにすることにより、日本語教育への貢献を図ることとする。

2 先行研究

学習者にとって有対動詞の自動詞、他動詞、受身の選択が困難であることは、守屋（1994）、小林（1996）、中村（2002）、曾（2012）など多くの先行研究で指摘されている。このうち、守屋（1994）は日本語の自動詞と他動詞の選択基準には図1のような条件が関わるとして、条件2～4の場合には人為的なイベントであっても自動詞が選択されると述べている。

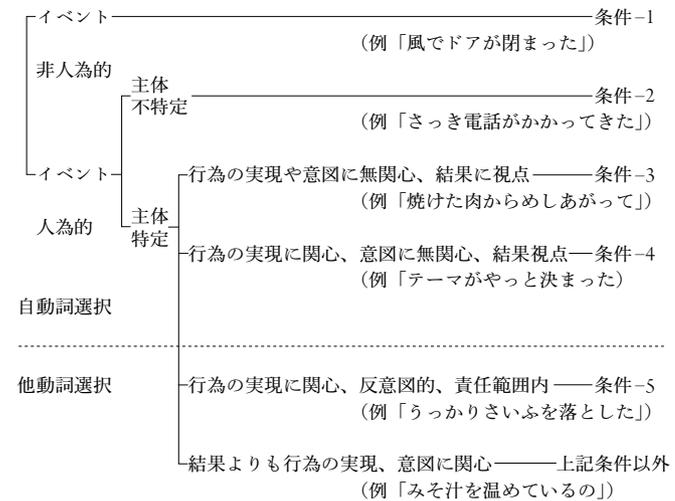


図1 守屋（1994）の自他動詞の選択条件

そのうえで、守屋（1994）は中級前半から中頃程度の学習者（中国語系60名、韓国語系49名、英語系21名）を対象に、例（7）、（8）のようなアンケートを23問実施した。その結果、「動詞の自他の選択の難しさは、程度の差はあれ、自動詞選択のむずかしさにある」（p.163）として、図1の条件のうち「1から4へと次第に習得が難しくなっていく」（p.163）と指摘している。

(7) ドア [を／が] 風でパタンと（閉めた／閉まった）。 （守屋1994の例①）

(8) （焼肉店で）「さあ、（焼いた／焼けた）肉から、順番に召し上がって下さい」 （守屋1994の例⑥）

守屋（1994）の分析は、自身も「ひとつまちがうと「あとからつけた理屈」にすぎなくなるおそれが大である」（p.163）と述べているように、後付けの論理になるきらいがある。しかし、日本語の自他選択には①人為的行為か否か、②動作主が特定の可否か、③話し手の関心が行為にあるか結果にあるかが関わることを示し、学習者は①②③の順にその処理が難しくなることを指摘している点で重要な研究である。そのため、本稿でも基本的に守屋（1994）の分類をもとに自動詞の選択基準を考える。ただし、②の動作主の特定・不特定に関しては分類基準が恣意的になりやすいため、本稿では動作主が特定の個人または複数の人物の場合は「特定」、不特定多数や社会一般の場合は「不特定」と考えることにする（よって図1の「電話」の例は本稿では「特定」と考える）。

次に、小林（1996）は相対自動詞による結果・状態の表現について、学習者は上級レベルになっても自動詞で「開いた」「消えた」と言うべきところを受身で「開けられた」「消された」と言ってしまうことを指摘している。これについて小林（1996）は図2を示し、日本語教育現場において「自然に消えた（1）のような場合だけでなく、（2）のような動作・行為の結果として残る状態も自動詞で表現するのだと指導する。この時点で、受け身形が既習であれば、（2）の場合、キエタ、キエテイルの代わりにケサレタ、ケサレテイルを使ってもいいかと質問が出る」（p.52）と述べ、「事態を描き出すための言語化にあたっては、どの段階の相を表現するのか、及び、行為者による行為に視点をおくのか、変化した対象に視点をおいて表現するのか、更に、どのようなムード表現なのか、

などを考慮に入れて言語形式を決定するが、学習者にとってはこの決定が困難である」と論じている。これに関して小林（1996）では研究の方向を示しているだけで、学習者がどのように言語化するのかについての詳細な分析は行われていない。しかし、多くの学習者が一番理解できないのは「人為が加わっているのにも関わらず、自動詞で表現する場合である」（p.54）と指摘している点は極めて示唆的である。これを受け、本稿では同じ人為的事態を表す場合でも、母語話者と学習者の間でいかなる認識のずれが生じるのかを具体的にみることにする。

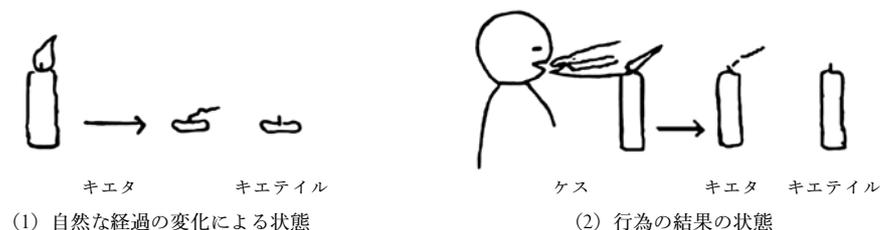


図2 小林（1996）の図5

次に、中村（2002）は中級学習者の受身の誤用例を収集し、学習者の誤用の要因には、①文体と受け身の不適切な関連、②自動詞に関する不十分な理解、③自動詞と他動詞の不十分な識別、④利害性と受け身の主体の共起に関する不十分な理解、⑤主語の省略における誤解と話者の視点の不統一、があることを指摘している。このうち、①に関しては例（9）を挙げて、「口語体であるできごとや状態をモノ、コトなど無生物を主体として叙述する場合、日本語では通常、受け身文は用いられず、自動詞文や「テアル文」が使われる」と説明されている。しかし、文語体でも「冷蔵庫に冷やされたビールがある」とは言いにくいと、口語体か文語体かということは重要な要素ではないと思われる。一方、ここでこの文を「冷蔵庫に5℃に冷やされたビールがある」のように変えると受身も使えるようになる。これはビールの温度を5℃に設定しようとする動作主の意図が意識されるためであると考えられる。本稿ではこの点について

て母語話者と学習者の認識の違いを見ることにする。

(9) ビールが冷やされているから、飲んでいいよ。(中村2002の例14)

また、中村(2002)は、②に関しては例(10)を挙げて、「複数の学習者が「風が窓を開けた」のであって、「窓が自ら開く」というのはおかしい。窓について叙述するなら、「風で窓が開けられた」というべきではないか」と述べている(p.27)として、「かなり日本語に習熟している学習者でさえも「自動詞は目的(目的語ではない)がなく自然におこる動作を表すもの」と答える」と指摘している^[註2]。自動詞に対して抱く学習者のこのような認識は、人為的行為による対象の変化を表す場合にも現れる。本稿ではこれがどのような場合に現れやすく、どのような場合に現れにくいのかについて分析する^[註3]。

(10) 風で窓があげられた。(中村2002の例4)

最後に、曾(2012)は母語話者が自動詞を使う場面で中国語を母語とする学習者は受身表現を使用してしまう現象が見られることに着目し、守屋(1994)のアンケート形式に受身を加えて調査を行っている。その結果、①「ドアが風でパタンと閉まった」のように非人為的に対象に働きかける場合は、母語話者は自動詞を好むのに対し、学習者は他動詞や受身を多く選択すること、②「火災で家が焼けた」のように迷惑や被害の意味が含まれる非人為的な事態の場合は、母語話者は自動詞と受身を選択するのに対し、学習者は受身を多く選択すること、③「誕生日にバラの花が届いた」のように人為的な事態で動作主が特定できない場合は、母語話者は自動詞表現を好むのに対し、学習者は受身を多く選択すること、④「よく冷えたビールがある」のように人為的な事態で動作主が話し手として特定できる場合は、母語話者は自動詞表現を好むのに対し、学習者は他動詞を多く選択することを指摘している。曾(2012)は守屋(1994)の研究に受身を加えることにより、学習者の選択傾向をより詳細に示している。ただし、研究の関心が自動詞と受身の選択に傾いているため、同じ「④人為的な事態で動作主が(話し手として)特定できる場合」であっても、先の例(1)

～(6)のような選択傾向の違いがある点については論じられていない。

以上の先行研究を受け、本稿では人為的事態を表す場合を対象に、母語話者と学習者の自動詞・他動詞・受身の選択傾向の違いについて分析する。

3 調査の概要

本稿ではアンケートによる自動詞・他動詞・受身の選択テストを利用して分析を行う。まず、守屋(1994)の自他動詞の選択条件に受身を加え、図3に示す12の事態に分類した。このうち本稿の考察対象を網掛けで示す。

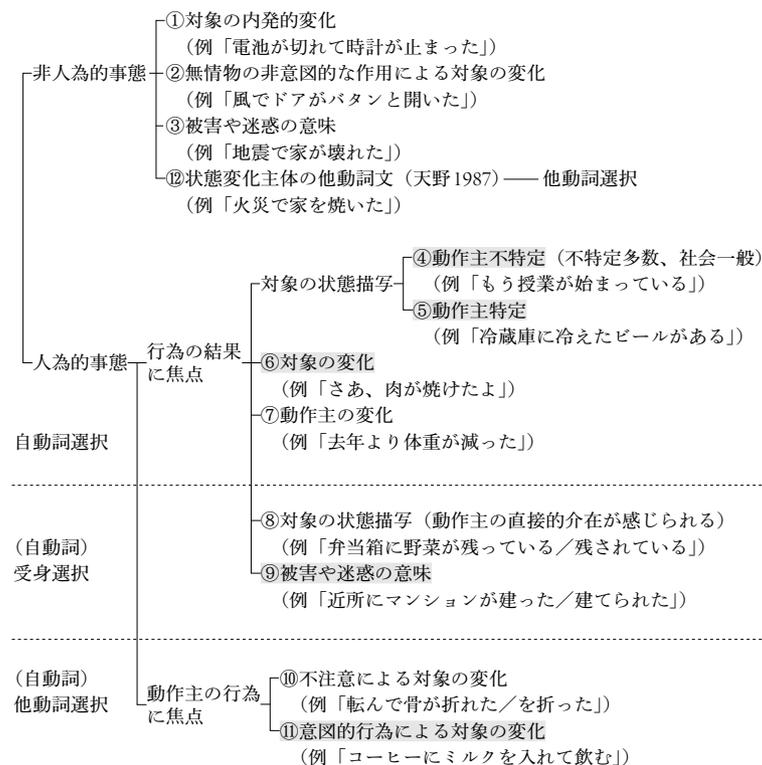


図3 本稿における事態の分類と母語話者の選択傾向

次にこの分類に応じて合計60問のアンケート項目を作成した。アンケートは守屋 (1994) や曾 (2012) にならい、被験者に格助詞「が／を」と「自動詞／他動詞／受身」を同時に選択させる方法を用いた。これにより自他の形態的な誤用と自動詞・他動詞・受身の選択意識の違いを区別して見ることができる。被験者は次のとおりである。

・日本語母語話者

名古屋大学学部生 114名 (2012年5月8～10日に名古屋大学にて実施)

・中国語を母語とする上級日本語学習者 (ほぼN1合格レベル)

湖南大学日本語系3年生 58名 (2012年5月24日に湖南大学にて実施)

このようにして、母語話者と学習者それぞれの格助詞と動詞相互の選択率を集計した^[注4]。このうち、本稿では表1に示す18問を考察の対象とする。本稿では「が受身」と「を受身」の区別については立ち入って議論しないため、両者を合わせて「受身」とする。同様に、格助詞と自・他動詞のねじれについても議論の対象としないため、合わせて「ねじれ」とする。また、カイ二乗検定および残差分析による検定結果を表1に示す。なお、以下の表とグラフでは便宜上学習者を「中国人」あるいは「C」、母語話者を「日本人」あるいは「J」と表記する。

表1 自動詞・他動詞・受身の選択テストの結果 (数字は選択率%)

	自動詞	他動詞	受身	ねじれ	検定結果 (「ねじれ」は除外)
事 態 ④	1. もう授業 (が／を) (始まって／始めて／始められて) いるから急ごう。				
	中国人	89.7	1.7	1.7	6.9 $\chi^2(2) = 4.24, p = .120, ns.$
	日本人	99.1	0.0	0.0	0.9 すべて有意差なし
	2. この雑誌 (が／を) 一番 (売れて／売って／売られて) いるよ。				
	中国人	75.9	0.0	12.1	12.1 $\chi^2(2) = 7.997, p < .05$
	日本人	96.5	0.9	2.6	0.0 自・受において有意差あり
事 態 ⑤	3. この町には鉄道 (が／を) (通って／通して／通されて) いる。				
	中国人	70.7	5.2	1.7	22.4 $\chi^2(2) = 2.262, p = .271, ns.$
	日本人	96.5	1.8	1.8	0.0 すべて有意差なし

事 態 ⑤	4. 壁に (割れた／割った／割られた) 鏡が掛かっている。				
	中国人	67.2	12.1	20.7	0.0 $\chi^2(2) = 41.982, p < .001$
	日本人	100.0	0.0	0.0	0.0 自・他・受において有意差あり
	5. そのコーヒーにはもう砂糖 (が／を) (入って／入れて／入れられて) いるよ。				
	中国人	46.6	19.0	12.1	22.4 $\chi^2(2) = 23.291, p < .001$
	日本人	89.5	2.6	7.0	0.9 自・他において有意差あり
	事 態 ⑥	6. 冷蔵庫によく (冷えた／冷やした／冷やされた) ビールがあるよ。			
中国人		55.2	20.7	24.1	0.0 $\chi^2(2) = 60.204, p < .001$
日本人		100.0	0.0	0.0	0.0 自・他・受において有意差あり
7. ビール (が／を) 5°Cに (冷えて／冷やして／冷やされて) いる。					
中国人		17.2	48.3	24.1	10.3 $\chi^2(2) = 6.701, p < .05$
日本人		29.8	32.5	36.8	0.9 他において有意差あり
事 態 ⑥		8. さあ、今日の夕食のメニュー (が／を) (決まった／決めた／決められた) よ。			
	中国人	48.3	31.0	13.8	6.9 $\chi^2(2) = 36.998, p < .001$
	日本人	90.4	8.8	0.0	0.9 自・他・受において有意差あり
	9. さあ、肉 (が／を) (焼けた／焼いた／焼かれた) から食べましょう。				
	中国人	22.4	32.8	8.6	36.2 $\chi^2(2) = 42.005, p < .001$
	日本人	86.0	14.0	0.0	0.0 自・他・受において有意差あり
	10. 問題 (が／を) (解けたら／解いたら／解かれたら) 手を挙げてください。				
	中国人	10.3	44.8	1.7	43.1 $\chi^2(2) = 42.145, p < .001$
	日本人	75.4	20.2	0.0	4.4 自・他において有意差あり
	11. お風呂 (が／を) (沸いた／沸かした／沸かされた) から入ってください。				
	中国人	81.0	13.8	1.7	3.4 $\chi^2(2) = 3.614, p = .164, ns.$
	日本人	77.2	22.8	0.0	0.0 すべて有意差なし
	12. さあ、スープ (が／を) (温まった／温めた／温められた) から飲んでください。				
中国人	31.0	51.7	15.5	1.7 $\chi^2(2) = 27.658, p < .001$	
日本人	63.2	36.0	0.0	0.9 自・他・受において有意差あり	
13. さあ、お茶 (が／を) (入った／入れた／入れられた) からひと休みしましょう。					
中国人	19.0	67.2	1.7	12.1 $\chi^2(2) = 11.527, p < .01$	
日本人	47.4	52.6	0.0	0.0 自・他において有意差あり	
事 態 ⑨	14. 家に帰ったら、窓ガラス (が／を) (割れて／割って／割られて) いた。				
	中国人	65.5	1.7	24.1	8.6 $\chi^2(2) = 11.650, p < .01$
	日本人	47.4	0.0	52.6	0.0 自・受において有意差あり
15. 彼のコーヒーには睡眠薬 (が／を) (入って／入れて／入れられて) いる。					
中国人	50.0	19.0	25.9	5.2 $\chi^2(2) = 19.469, p < .001$	
日本人	51.8	1.8	46.5	0.0 他・受において有意差あり	

事態⑩	16. コーヒーにミルク (が/を) (入って/入れて/入れられて) 飲む。				$\chi^2(2) = 1.091, p = .580, ns.$	
	中国人	3.4	89.7	0.0		6.9
	日本人	2.6	95.6	1.8	0.0	すべて有意差なし
事態⑩	17. 電子レンジで冷えたスープ (が/を) (温まった/温めた/温められた)。				$\chi^2(2) = 6.146, p < .05$	
	中国人	8.6	75.9	13.8		1.7
	日本人	5.3	90.4	4.4	0.0	他・受において有意差あり
事態⑩	18. さあ、ケーキ (が/を) (切れた/切った/切られた) から食べましょう。				$\chi^2(2) = 13.745, p < .01$	
	中国人	13.8	69.0	13.8		3.4
	日本人	20.2	78.9	0.9	0.0	受において有意差あり

以下、4節では事態⑩、5節では事態④⑤⑨、6節では事態⑥について論じる。早津 (1987: 96) は「有対他動詞は動作主の働きかけを表現し、有対自動詞は被動者の変化を表現している」と述べているが、母語話者と学習者ではいかなる事態を「動作主の働きかけ」と認識し、いかなる事態を「被動者(対象)の変化」と認識するかに違いが見られる。この違いを追究するのが本稿の目的である。

4 動作主の意図的行為による対象の変化を表す場合

本節では動作主の意図的行為による対象の変化を表す場合(事態⑩)における自動詞・他動詞・受身の選択傾向を見る。まず、問16(図4)は主節の「飲む」によって動作主の存在が意識され、問17(図5)は電子レンジを使う動作主の行為が意識されるため、いずれも文全体が他動詞的に解釈されやすくなる。そのため、母語話者も学習者も他動詞を選択する割合が高くなると考えられる。

一方、問18(図6)は母語話者の20.2%が自動詞の「切れる」を選択しているが、その場合は「ケーキを切るのに手間がかかり、やっと切れた」という可能の意味を帯びた表現となる。しかし、特にこのような文脈を思い浮かべなければ、母語話者も学習者も動作主の行為に焦点を当てて他動詞の「切る」を選択しやすいと考えられる。なお、問18に関しては、6節で「さあ、肉が焼けたよ(自動詞選択)」などとの違いについて論じる。

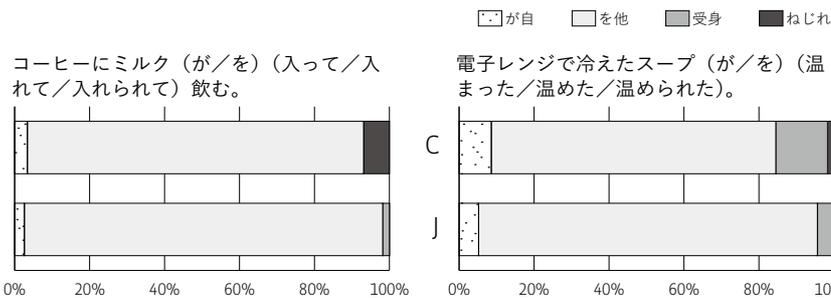


図4 問16の選択率

図5 問17の選択率

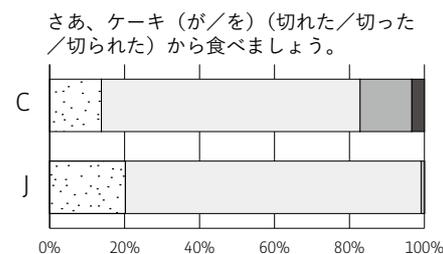


図6 問18の選択率

5 対象の状態描写を表す場合

本節では対象の状態描写を表す場合(事態④と⑤)と被害や迷惑の意味を表す場合(事態⑨)における自動詞・他動詞・受身の選択傾向を見る。まず5.1では、同じ対象の状態描写を表す場合でも、母語話者は常に自動詞を選択しやすいのに対し、学習者は動作主が不特定の場合(事態④)は自動詞の選択率が高くなり、動作主が特定の場合(事態⑤)は自動詞の選択率が低くなることを見る。次に5.2では、事態⑤とそれに被害や迷惑の意味が加わった事態⑨との比較を行い、母語話者は事態⑤の場合にはほぼ自動詞を選択するのに対し、事態⑨の場合は自動詞も受身も選択されること、一方で学習者は事態⑤の場合にも事態⑨の場合にも自動詞と受身の両方が選択されることを指摘する。

5.1 動作主の特定・不特定

問1～6 (図7～12)の結果を見ると、対象の状態描写を表す場合、母語話者は自動詞の選択率がおよそ90%以上と極めて高いことが分かる。一方、学習者は問1～3 (図7～9)では自動詞の選択率が高いのに対し、問4～6 (図10～12)では相対的に自動詞の選択率が低くなるという違いが見られる^[注5]。両者を比較すると、前者の動作主は学校、不特定多数の読者、社会一般など不特定の人物であるのに対し、後者の動作主は既知か未知かは別にして特定の人物であるという違いがある。このことから、対象の状態描写を表す場合、母語話者は動作主の特定・不特定にかかわらず自動詞を選択しやすいのに対し、学習者は動作主が不特定の場合は自動詞の選択率が高いものの、動作主が特定の場合は動作主の行為に着目しやすくなり、自動詞の選択率は6割前後と低くなり、他動詞あるいは受身の選択率が増えることが分かる。

一方、問6と7 (図12と13)を比べると、同じ対象の状態描写を表す場合であっても、前者は母語話者の100%が自動詞を選択しているのに対し、後者は自動詞、他動詞、受身がおよそ三分の一ずつ選択されているという違いが見られる。これは後者の場合、前者に比べてビールの温度を5°Cに設定しようとする動作主の意図が意識されやすいためであると考えられる。そして同じ母語話者でも、対象であるビールの状態のみ着目すれば自動詞が選ばれ、動作主の行為に着目すれば他動詞が選ばれ、動作主の行為による結果状態であることに着目すれば受身が選ばれるのである。これに対し、学習者の場合も自動詞、他動詞、受身のいずれもが選ばれる点では同じであるが、他動詞の選択率がおよそ5割と母語話者より高くなる点に特徴がある。このことから、学習者の場合は動作主の存在が意識されやすければ、その分他動詞の選択率が高くなることが分かる。

5.2 被害や迷惑の意味の有無

次に、上の事態⑤ (問4, 5 (図10, 11))とそれに被害や迷惑の意味が加わった事態⑨ (問14, 15 (図14, 15))とを比較する。両者を比較すると、前者は母語話者のおよそ90%以上が自動詞を選択しているのに対し、後者は自動詞と受

□が自 □を他 □受身 ■ねじれ

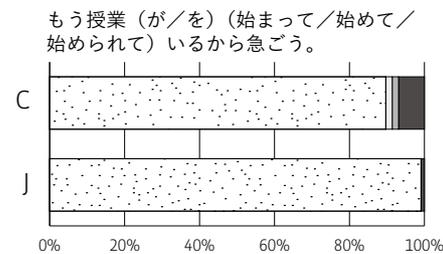


図7 問1の選択率

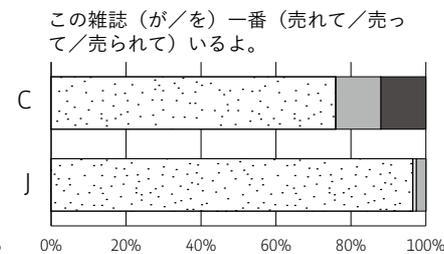


図8 問2の選択率

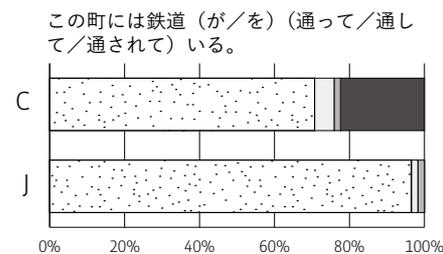


図9 問3の選択率

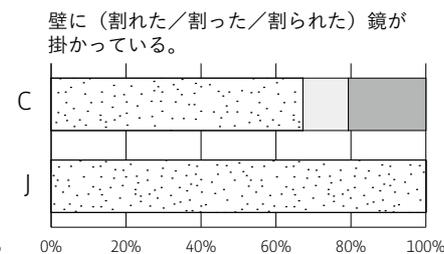


図10 問4の選択率

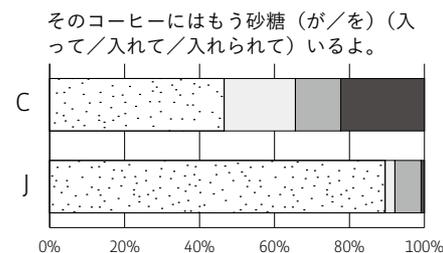


図11 問5の選択率

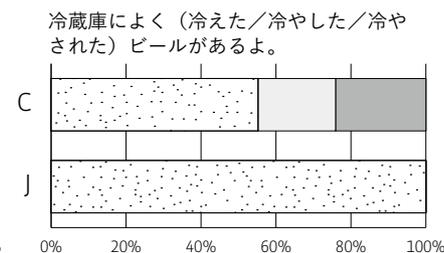


図12 問6の選択率

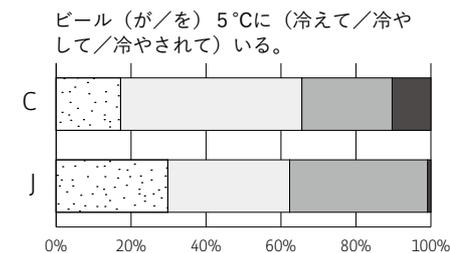


図13 問7の選択率

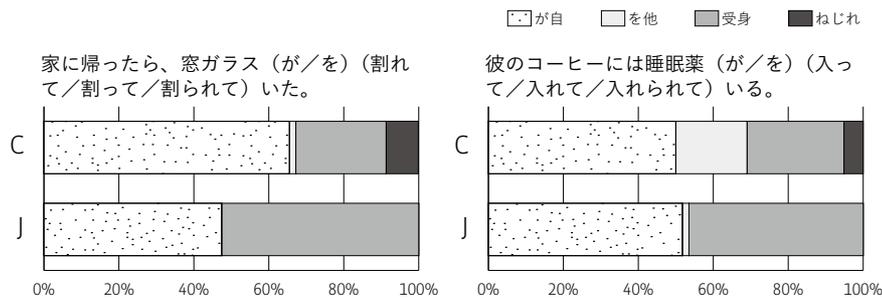


図14 問14の選択率

図15 問15の選択率

身がおよそ半分ずつ選択されているという違いがある。これは前者の場合は対象の存在に焦点が当たり、動作主の存在に関心が払われにくいのに対し、後者の場合は話手に被害や迷惑をもたらした動作主の存在に関心が払われやすいためであると考えられる。そして同じ母語話者でも、対象の状態にのみ着目すれば自動詞が選ばれ、動作主の行為による結果状態であることに着目すれば受身が選ばれるのである。これに対し、学習者の場合は、事態⑨において母語話者に比べて受身を選択する人の割合が少なく、問15（図15）では他動詞を選ぶ人の割合が多いことに気付く。現段階ではこの理由について説明できないが、今後新たな調査をして分析していきたいと思う。

6 対象の変化を表す場合

本節では対象の変化を表す場合（事態⑥）における自動詞・他動詞・受身の選択傾向を見る。問8～13（図16～21）を見ると、いずれも母語話者は受身を選んでおらず、自動詞と他動詞の選択傾向に違いのあることが分かる。このうち、問8～11（図16～19）では母語話者の自動詞の選択率が75.4～90.4%と他動詞に比べてかなり高い。これらの事態は人為的行為により対象が変化する点で事態⑩と似ている。しかし、母語話者は「メニューの決定」、「肉の焼き上がり」、「問題の解決」、「お風呂の焚き上がり」までの過程をそれぞれ「意見表出

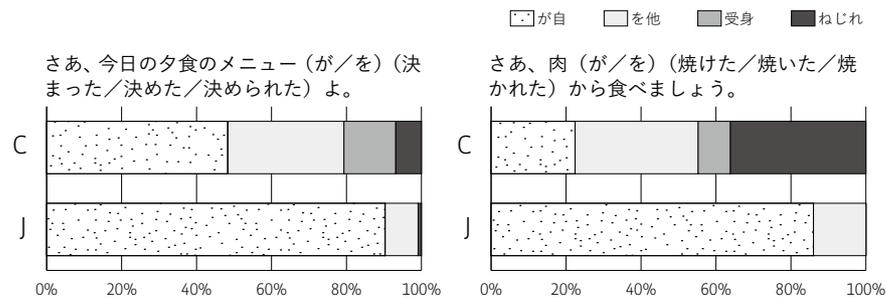


図16 問8の選択率

図17 問9の選択率

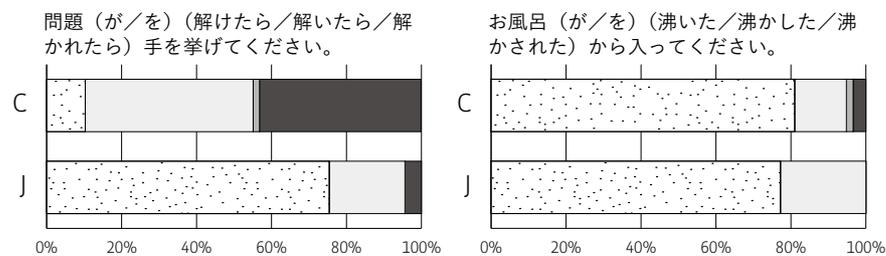


図18 問10の選択率

図19 問11の選択率

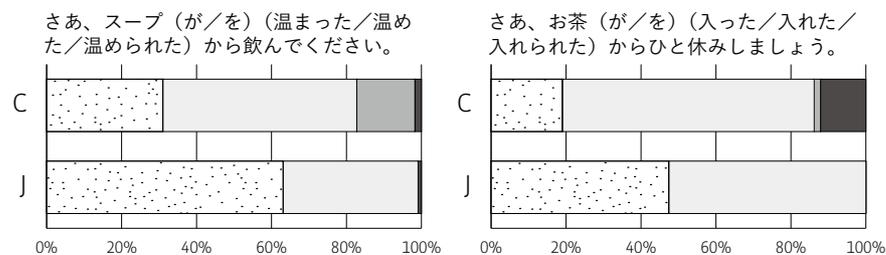


図20 問12の選択率

図21 問13の選択率

(人為作用)→意見統一までの成り行き(自然作用)、「肉を火にかける(人為作用)→火による肉の化学変化(自然作用)」、「問題の思考(人為作用)→思考の熟成(自然作用)」、「お風呂に火をつける(人為作用)→火による水温上昇(自然作用)」と捉え、人為だけではなく自然の成り行きによる変化と捉えるため自動詞の選択率が高くなるのだと考えられる^[注6]。これに対し、「ケーキの切断」は人が最後までナイフを入れ、「自然作用」の要素は考えにくいいため自動詞は選択されにくいのである。ただし、「ケーキが堅かったりたくさんあったりして、切るのに手間がかかり、やっと切れた」という場面を思い浮かべれば、可能の意味を帯びた自動詞表現も使えるようになる。

一方、問12(図20)では母語話者の自動詞選択率が63.2%、問13(図21)では47.4%と低くなる。この場合も事態の変化過程において「鍋を火にかける(人為作用)→火によるスープの加熱(自然作用)」、「お茶の葉にお湯を注ぐ(人為作用)→お湯によるお茶のエキスの抽出(自然作用)」という自然作用と捉えられるため自動詞も選択されるが、先の4つに比べて相手のためにスープを温めたりお茶を入れたりするという動作主の意図性が感じられやすいため、他動詞も選択されやすくなるのだと考えられる^[注7]。

以上のように、母語話者は同じ人為的行為による対象の変化を表す場合でも、自動詞を好む場合もあれば、他動詞を好む場合もあれば、どちらも選ばれる場合もあるのに対し、学習者は「お風呂が沸く」以外はいずれも母語話者に比べて自動詞を選択する割合が低い。これは「お風呂が沸く」はおそらくこのセットで覚えているためであるが、それ以外は人為的行為による事態であるにもかかわらず自然作用として理解するのが困難だからであると考えられる。

7 まとめ

本稿では同じ人為的事態を表す場合でも、母語話者と学習者では自動詞、他動詞、受身の選択基準に次のような違いのあることを見た。①動作主の意図性が認識されやすい場合は、母語話者・学習者ともに他動詞を選択する傾向にある。②対象の状態描写を表す場合は、母語話者は常に自動詞を選択しやすい。一方、学習者は動作主が不特定の場合は自動詞の選択率が高いが、動作主が特

定の場合は自動詞の選択率が低くなる傾向がある。③対象の状態描写に被害や迷惑の意味が加わる場合は、母語話者・学習者ともに自動詞も受身も選択する傾向がある。④対象の状態変化を表す場合は、母語話者は事態の変化過程において「(人為作用)→(自然作用)」を見だし、動作主の意図性が弱い場合には自動詞を選択し、動作主の意図性が感じられやすいと他動詞を選択する。これに対し、学習者はいずれも他動詞を選択しやすい傾向がある。以上の結果、母語話者は動作主の存在を強く認識しなければ他動詞を選択しにくいのに対し、学習者は動作主の存在を感じれば他動詞を選択しやすいことが分かった。今後は図3において今回考察の対象としなかった事態についても分析を進めたい。

(名古屋大学)

注

- [注1] …… 守屋(1994)は自動詞と他動詞のみ対象とし、受身は選択肢に入れていない。
 [注2] …… 本稿の考察範囲ではないが、筆者の調査でもこのような「無情物の非意図的な作用による対象の変化」を表す場合、日本語母語話者は自動詞を選択する割合がおおよそ90%以上と高いのに対し、日本語学習者は上級でも受身を選択する割合が20～35%程度出現するという傾向が見られた。
 [注3] …… なお、中村(2002)の③～⑤も些か説明が不十分なまま終わっているが、内容的には興味深いため、本稿で扱わなかったデータを利用して別稿で論じるつもりである。
 [注4] …… 選択率は小数点以下第二位を四捨五入して算出しているため、表中の横4つの数字の合計がきっちり100%になっていないものもある。
 [注5] …… 問2,3(図8,9)の「が自動詞」の選択率は75.9%、70.7%程度であるが、「ねじれ」を除いて計算すると、それぞれ86.3%、91.1%と高くなる。これに対して、問5(図11)では「ねじれ」を除いても60.1%にしかならない。
 [注6] …… 影山(2001:26)は非対格自動詞(原文では「能格自動詞」)の意味構造について、「主語名詞の内的な性質ないし内的活動が誘因となって変化が起こる」という自発的な変化としてとらえることができる」と述べている。
 [注7] …… コーヒーや紅茶の場合は自動詞の「入る」よりも他動詞の「入れる」の方が自然であるように思われる。この点については今後さらに調査を進めたい。

参考文献

天野みどり(1987)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151, pp.1-14. 国語学会

- 影山太郎 (2001) 「第1章 自動詞と他動詞の交替」『日英対照 動詞の意味と構文』
pp.12-39. 大修館書店
- 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況」『文藝
言語研究・言語篇』29, pp.41-56. 筑波大学文芸・言語学系
- 曾ワンティン (2012) 『中国語母語話者における有対他動詞の受身表現と自動詞の使い分
けについて』名古屋大学修士学位論文
- 中村祐理子 (2002) 「中級学習者の受身使用における誤用例の考察」『北海道大学留学生セ
ンター紀要』6, pp.21-36. 北海道大学留学生センター
- 早津恵美子 (1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』
6, pp.79-109. 京都大学言語学研究会
- 守屋三千代 (1994) 「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に」『講
座日本語教育』29, pp.151-165. 早稲田大学日本語研究教育センター